

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520803

研究課題名(和文) 近世日本における自然資源の利用と管理に関する歴史学的研究

研究課題名(英文) Historical study about the use and management of natural resources in the early modern in Japan

研究代表者

高橋 美貴 (Takahashi, Yoshitaka)

東京農工大学・(連合)農学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90282970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本の近世社会を主な事例として、自然資源の利用と管理に関する歴史学的研究を、主に漁業(水産資源)を事例として行うことである。このような目的意識のもと、本研究では、豆州内浦などを分析対象拠点として、資源変動とそれに対する地域の生業・社会の対応を、事例に則して掘り下げる地域史研究の作業と、全国各地に明治期の行政文書として残されている、伝統的生業の技術や技能・慣行などに関する行政・調査資料の概要調査とデータ収集、という二つの作業を進めた。これらの研究をまとめ、最終年度に『近世・近代の水産資源と生業―保全と繁殖の時代―』を吉川弘文館から刊行した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to conduct a historical research about the use and management of natural resources in the early modern in Japan, as the case of aquatic resource. In this study, I have proceeded two researches as follows. (1) The first is researches of local histories about reactions shown by local societies and industries to aquatic resource amount change. (2) The second is to collect and analyze administrative documents about policies and customs of traditional industries, which have been remained by prefectures. Based on these research, I published a book, "Aquatic resources in Japan from early modern to modern and livelihood -the era aiming at preservation and propagation of natural resources-" from Yoshikawa-Kobunkan Publishing Co.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：自然資源の利用と管理 資源保全 近世日本 近代日本

### 1. 研究開始当初の背景

近年、地域史研究(地域社会の変動や地域の生業に関わる歴史的研究)を行う際に、それらを取り囲む自然的・環境的条件を考慮に入れることの必要性がしばしば指摘されている。一方、民俗学や社会学・人類学・倫理学などでは、「生業」という営みを「もっとも基本的な人間の自然への働きかけ」として捉えなおし、そこから「人間と自然とのかかわり」について考察していく環境史的研究視角が定着し、学際的な研究の磁場を作り出してきた。

私はこれまで、このような生業論・生業史の視角を意識しつつ、近世日本の沿岸地域を主な事例に、水産資源や山林資源の利用とそれをめぐって形成される制度や社会関係の検出に取り組んできた。そこから、近世の民衆が近世以来、自らを取り囲む環境的条件に適応するなかで構築・獲得してきた海川山という自然利用に関わる知とそれに基づいた利用秩序を検出すること、それに対して近世領主権力さらには近代行政が政策として打ち出してくる秩序との関わりや、そのなかで生み出される変遷などを検討することを作業課題としてきた。このような作業を経ることで、自然資源の利用と管理に関わる歴史学的研究という観点から日本の近世社会像について検討を続けている。

今後は、資源として利用される生物や働きかけの対象となる自然の生態的な特徴などにも配慮しつつ、自然資源の利用・管理史と環境史研究との統合を意識することで研究を深化させていくことが求められてくるように思われる。これが本研究開始当初の研究の背景である。

### 2. 研究の目的

本研究では、上記のような関心のもと、(1) 特定フィールドを設定して資源変動と地域の生業・社会の対応関係を事例に則して掘り下げる地域史研究の作業と、(2) 全国各地に明治期の行政文書として残されている、伝統的生業の技術や技能・慣行などに関する調査・行政資料の概要調査およびデータ収集、という二つの作業を進めることを目的とした。

(1) については、豆州内浦地域(静岡県沼津市江浦湾沿岸地域。駿河湾の北東奥に位置)や三陸沿岸などを主な事例として、カツオ・マグロ・サケなど海洋回遊資源の変動を復元しつつ、それに基づいて海山に代表される地域の自然資源を利用した生業・社会の変動史を描くことを目指した。このような作業を行う背景のひとつに、近年、海洋資源の変動に関する理論に大きな変化が生じたことがある。海洋生物資源は気候変動に基づく地球環境システムの構成部分として、数十年のタイムスケールで増減をくり返していることが明らかになっているのである(レジーム・シフト理論)。ことに前近代においては、

資源回遊量の増減を左右する要因としては、人為的な影響よりも、気候変動に基づく資源変動が大きな影響を与えていたことが推測される。本研究では、このような数十年おきに襲ってくる海洋生物資源の資源変動に対して、この地域の漁業秩序や社会秩序にどのような変動が生じたのか、海・山を含めた地域の生業がいかなる変化(=対応)を示したのか、といった問題にアプローチすることを作業課題とした。

一方、(2)については、とくに漁業関係史料をターゲットとして、全国に残存する明治期の都道府県行政文書の所在確認と関連史料の収集を進めることを目的とした。一見すると、これらの行政史料は近代史研究の研究素材のようにも見えるが、実は、そこから近世における生業の技術や知識、あるいは自然資源利用のあり様などが透けて見えてくるのがままある。とくに19世紀末は、国家的なレベルで資源問題が水産行政の主要課題のひとつとして位置づけられ、近世に各地域で自然資源利用をめぐってストックされてきた水産資源に関わる慣習の発掘などが行政の手によって進められた。したがって、これらの史料を用いることで、近世を射程に入れた自然資源の利用や管理をめぐる生業史・社会史・政策史を構想していくことが可能になるのではないかと考えたのである。本研究では、そのための全国的な史料の概要調査と史料収集・データベースの作成を進めることを目的とした。

### 3. 研究の方法

上記の目的に迫るため、本研究では、次の三つの作業をその方法として採用した。

(1) 目的(1)に関わる分析・調査作業：事例としてとりあげたのは、伊豆国君澤郡内浦地域と三陸沿岸地域、とくに仙台藩名振湾沿岸地域(旧北上川河口地域)である。

伊豆国君澤郡内浦地域の近世史料については、すでに1937~1939年にアチックミュージアムから『豆州内浦漁民史料』という大部の史料集が刊行されている(のち『日本常民生活資料叢書 第15~18巻』三一書房・1972~73年に所収)。また、1999年には、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会の編さんになる『沼津市史 資料編 漁村』(沼津市)も刊行されており、現段階で相応の分析に耐える史料が活字化されている。駿河湾沿岸地域では、マグロ・カツオなど回遊性魚類の生態に規定され、しばしば村々の連携や対立が生み出された。本研究では、これらの事実に着目しながら、前述した活字史料を用いた分析と立論を進めた。個別論文の執筆にはいたらなかったものの、『豆州内浦漁民史料』のデータベース化は終了し、またその一部を2013年に刊行した拙著『近世・近代の水産資源と生業—保全と繁殖の時代—』(吉川弘文館)に反映させることもできた。一方、については、仙台藩の桃生・本吉両

郡にはさまれた名振湾沿岸地域に残された史料群を用いた分析作業を行った。本史料群の多くは東日本大震災によって消失したが、幸い震災前にその多くの撮影を終了しており、本科研ではそれを史料として用い、分析を行った。この地域は、内湾におけるサケ立網と河川におけるサケ網漁に関する史料を多く残している。サケもまた数十年単位で大きな資源変動を繰り返すが、この地域に残された史料には、その資源変動への対応に関わる文書が残されており、目的(1)で掲げた課題に迫るために最適な分析素材だと考えたのである。これについては、2013年に「近世の水揚帳とサケの漁況変動」(『歴史評論』764)として発表することができた。

なお、当初の計画にはなかったが、の作業と関わり、東日本大震災によって被災した史料レスキュー活動と関わりながら、三陸沿岸部でレスキューされた史料の目録作成および分析も並行して進めた。具体的には、自身が震災直後に実際のレスキューに関わった女川組大肝入を勤めた木村家文書を対象に作業を開始した。沿岸部ゆえ、当初、水産資源に関わる史料の発見を期待したが、意外にも山林関係史料が少なからず残されており、沿岸部における山林資源の利用と管理というテーマに関わり、現在まで分析を継続中である。

#### (2) 目的(2)に関わる分析・調査作業

目的(2)に対応する作業として、本研究では、漁業関係の史料に重きを置いて、全国に残存している、明治期における都道府県の行政文書の所在確認と関連史料の収集を進めた。具体的には、愛媛県・滋賀県・山口県・宮崎県・島根県・奈良県を対象に明治期県庁文書の閲覧・撮影を進めた。撮影できた史料の分量は全体から見るといまだ一部に止まり、また宮崎県のように史料閲覧に制限がかり十分な閲覧・撮影が困難であった県もあるものの、滋賀県庁文書については明治20年までの史料については、おおよその撮影を終えることができた。また、島根県庁文書については、当初の予想を超えて大部の史料が残存していることを知ることができた。一方、収集できた史料のデータベース化については、研究期間三年間では終えることができず、とくに滋賀県庁文書・愛媛県庁文書を中心に作成作業を継続中である。

本科研研究期間中の、主な史料の閲覧・撮影経過は以下のとおりである。

#### 2011年度

- 8月8～11日 愛媛県庁文書の閲覧・撮影
- 12月26～27日 滋賀県庁文書の閲覧・撮影
- 3月7～10日 山口県庁文書の閲覧・撮影
- 3月15～18日 愛媛県庁文書の閲覧・撮影
- 3月22～24日 滋賀県庁文書の閲覧・撮影

#### 2012年度

- 7月17～21日 宮崎県庁文書の閲覧・撮影
- 3月5～9日 島根県庁文書の閲覧・撮影

#### 2013年度

6月26～27日 奈良県庁文書の閲覧・撮影  
12月21～22日 滋賀県自治体史の閲覧(滋賀県庁文書の追加調査)

#### 4. 研究成果

本研究では、次の(1)～(3)のような三つの成果を得た。

(1)「近世日本における自然資源の利用と管理に関する歴史学的研究」と題した本科研の総括として、このテーマに関わる自身の研究成果を、研究史的な位置付けを含めて体系的に整理する作業を進めた。その結果、次の

・ 二つの成果を得た。ひとつは、本科研最終年である2013年に吉川弘文館から拙著『近世・近代の水産資源と生業－保全と繁殖の時代－』を刊行できたことである。本書は、生物資源の利用と管理という観点から環境史研究に接近するという問題関心のもと、近世・近代日本における漁政の展開とそれがもつ歴史的な位置について、水産資源の利用と管理という観点から検討を加えたものである。具体的には、水産資源の保全と繁殖というキーワードを用いて、17～19世紀における日本の漁業史・漁政史を、世界史的な拡がりのなかで位置づけることを試みるとともに、近世において水産資源と人間・社会がどのような関係性を取り結んでいたのかを概観しつつ、近世日本における水産資源の利用と管理、とりわけ近世日本における水産資源政策の登場(その存否と特質)について検討を行った。また、問題提起の短文ではあるが、2012年に近年の水産学において提起されているレジーム・シフト理論を整理しつつ、漁業史研究から環境史研究を展望する可能性について論じた「漁業史研究からみる環境史研究への展望」(『地方史研究』358)を、さらに翌2013年には、自然資源の利用と管理に関する歴史学的研究という本科研の視野をひろげるべく、環境史研究の観点から農業史研究の研究史総括を試みた「近代日本農業史研究と環境史研究」(鳥越皓之編『環境の日本史5 自然利用と破壊－近現代と民俗－』吉川弘文館)を発表した。この論文は、近代日本を対象とした農業史に関わる研究成果の概観を通して、環境史(人と自然との関係史)として継承しうる論点や視角、今後に向けた課題の抽出を試みたものである。稲作を基軸に組み立てられてきた近代日本農業史研究の成果をまとめつつ、それとの対比で在来農法の再評価論を位置づけ、さらに複合生業論・複合経営論などの視点から蓄積されつつある近年の地域環境史研究との接点を模索することを試みた。これらの執筆作業は、前掲拙著『近世・近代の水産資源と生業－保全と繁殖の時代－』刊行前の研究史整理・再確認作業としても有益であった。

(2) 特定フィールドを設定して資源変動と地域の生業・社会の対応を事例に則して掘り下げる地域史研究の作業については、次の

・ の二つの成果を得た。ひとつは、当

初計画していた前傾『日本常民生活資料叢書第15～18巻』のデータ・ベース化を終えることができたことである。いまひとつは、大きな資源変動を繰り返すサケを事例に、宮城県石巻市雄勝町永沼家に残された鮭水揚帳の分析を通して、近世後期の三陸沿岸におけるサケ建網操業のあり様や漁況変動、それに対する対応史などを抽出し、それを通して、一八世紀末以降の仙台藩領内の河川や河口部で生じていた環境的な変化を見通すことを試みた「近世の水揚帳とサケの漁況変動」（『歴史評論』764）を公表したことである。この論考では、この時期の仙台藩領で、河川・河口への土砂流出や土砂堆積、またそれによって生じる水の濁りが問題化しており、海と川と山とを連結した流域史的な地域史研究の必要性を提起した。さらに、本科研では、分析の時代枠をいま少し広げ、一九世紀末から二〇世紀初めにかけての世紀転換期における日本産魚油の生産動向と、その動向をもたらした歴史的状況について検討を試みた「一九世紀末～二〇世紀初・魚油を通してみた日本と世界―石巻周辺地域における魚油生産の変動を出発点として―」（菊池勇夫・斎藤善之編『講座東北の歴史 第四巻 交流と環境』清文堂出版）を公表することもできた。この時期に日本産魚油は欧米向け輸出を大きく増加させるが、その背景に、硬化技術の確立による魚油利用の拡大と、それまで西洋諸国に対する魚油供給拠点であった北欧・米国における不漁（その結果としての魚油生産量の減少）があったことなどを指摘し、世界的な水産資源変動に応じて日本の漁業生産の歴史的展開が規定されていることを示す一事例を示した。

（3）上記の作業と並行して、全国に残存する明治期における都道府県の行政文書（水産業関係史料）の所在確認と関連資料の収集を進めた。具体的には、愛媛県・滋賀県・山口県・宮崎県・島根県・奈良県を対象に明治期県庁文書の閲覧・撮影を進めた。前述したように、撮影できた史料の分量は全体から見るといまだ一部に止まるが、滋賀県庁文書については明治20年までの史料についてはおおよその撮影を終えることができたほか、奈良県庁文書については、関係史料の数自体が少なかったこともあり撮影を終了した。収集できた史料のデータベース化については、研究期間三年間では終わることができず、とくに滋賀県庁文書・愛媛県庁文書を中心に作成作業を続けているが、滋賀県庁文書については、その成果の一部を前掲拙著『近世・近代の水産資源と生業―保全と繁殖の時代―』に取り込むことができた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4件）

高橋美貴、「近世の水揚帳とサケの漁況変動」、『歴史評論』、査読無、764、2013、5-18

高橋美貴、「近代日本農業史研究と環境史研究」、『査読無、鳥越皓之編『環境の日本史5 自然利用と破壊―近現代と民俗―』吉川弘文館、2013、76-101

高橋美貴、「問題提起 漁業史研究からみる環境史研究への展望」、『地方史研究』、査読無、358、2012、58-61

高橋美貴、「一九世紀末～二〇世紀初・魚油を通してみた日本と世界―石巻周辺地域における魚油生産の変動を出発点として―」、『査読無、菊池勇夫・斎藤善之編『講座東北の歴史 第四巻 交流と環境』清文堂出版、2012、285-309

〔学会発表〕（計 0件）

〔図書〕（計 1件）

高橋美貴、吉川弘文館、『近世・近代の水産資源と生業―保全と繁殖の時代―』2013、297

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高橋美貴（TAKAHASHI, Yoshitaka）  
東京農工大学・大学院農学研究院・准教授  
研究者番号：90282970

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：